

九十年余の生涯を顧みて

九回生 飯島 泰蔵



平成卅年九月廿四日を迎へて満九十三歳となりました。あと七年で百歳かと思うと、不思議な気分です。病氣勝ちだった幼少期には、考えも及ばないことでした。健康の有難味を、ひしひしと感じ取っているところです。老醜をさらしてはいないか、人様に迷惑を掛けてはいまいか、と気を配って来ました。今更人様に役立つような振舞いが出来よう筈はないのですが、長年に涉った経験が少しでも生かされれば、と願っている今日此頃です。

悠々自適と云う言葉が有ります。何のこだわりもなく、自由闊達に前途を見据えて歩んで行くことです。そんな境地の晩年が理想であると考へて来ましたが、何の心配も気苦労もない人生が果たして充実したものであるかは疑問です。未だ究極の人生の理想が達観出来ていない証拠が、其処に有る様に思えてなりません。

大学を卒業した昭和廿三年以来、ずっと研究者としての道を行って参りました。七十年に及んだ研究生活の中で行った研究内容は多岐に亘っていますが、その中で社会に影響を与えた最も大きかった成果は、文字読取装置の開発でした。

手書きの平仮名・英数字・漢字等の約百種類に及ぶ文字を、秒速二千字で読取る機能を持った装置だったのです。この装置は昭和四十六年(一九七一)に開発され、現在国立科学博物館に納められています。開発成果が発表された当時世界的な反響を呼び、暫くの後「紫綬褒章」の受章に繋がりました。またこの成果を基にして「郵便番号の自動読取区分機」(郵政省)が開発され、日本全国の二等郵便局に設置されました。「勲三等瑞宝中綬章」の受章は、これに拠るものだったので。

年金生活で派手な出費は叶いませんが、生活を楽しむに十分な入金であることは、有難いことと感謝しています。長年のつき合いだった友人達が、一人減り二人減りして、次第に淋しくなつて来ました。新しく知り合った近隣の友人達を、大切にしたいと心掛けているところです。学校時代の同期会は、老齢期に入ったので全て解散して仕舞いました。時々耳にする友人の訃報に接する度に、次は我身かと思うのも切ないことです。週に一度近隣に住む老人達の会合が有つて、毎回それに参加していますが、最近では私が最年長者となりました。そのバトンを何時引き渡すことになるか、それは私の寿命に懸かっている事柄です。

先日その会合で敬老会が催され、表彰されました。悦ぶべきことでしょうか、墓場に近付きつつあることを思い知る日でもあつた訳です。何の果すべき責任もなく、気軽な毎日が過ぎて行きます。ゆつくりと自由を楽しんでおれば良いのですが、責任のある地位で奮闘していた若い頃のことを思い出してみると、懐かしく思わないでは居られません。

文字読取装置(ASPET/71)

当時のオフィス用電算機室と同様空調付きで二重床の部屋が必要、床下は配線一杯でした。左奥が書類を読み取る装置です。



操作用コンソール

右奥のディスプレイにAの字が表示されています。



情報処理技術遺産認定証



学生時代最も得意だった科目は、数学でした。数学が最も頻繁に使用される学問分野は物理学でしたが、その大半は微分方程式に拠るものでした。それに対して積分方程式に興味を持ち始めた私は、これを用いて新しい問題を解いてみよう、と考えたのでした。大学卒業後研究者への道を只管歩んできたのですが、その業績の大半は積分方程式を用いた厳密解として解かれたものだったのです。

基本的な問題に対する厳密解が得られるならば、その解の細部に亘る構造をあくまでも詳細に亘って解明することが可能です。近似解と厳密解との本質的な差異を知ることが、大切なことだと直感しました。研究者として社会に出てからの十年間は、只管厳密解を求めることに集中していました。幾つかの貴重な成果は、そうした集中力の結集に拠るものだった、と思います。

しかし厳密解を得ることが可能な問題は極めて限定されています。多くの難しい条件が並立しているからです。こうした状況の下に、一九七一年（昭和四十六年）、ASPECT/71と名付けた文字読取装置の開発に成功したのでした。この成功には、ボケの理論と複合類似度法と云う独自の技

術が採用されました。その画期的な性能は従来の技術を遙かに凌駕するものとして、世の注目を集めました。電子計算機と云う新技術が現れ、情報処理と名付けられた新分野が開かれた頃、パターン認識技術として登場したのが、文字読取技術だったのです。この成果は紫綬褒章の受章となり、さらにこの技術を土台として構築された、郵便番号読取区分機の開発成果が認められて、勲三等瑞宝中綬章の受章として結実されました。

受章そのものは兎も角、人々のお役に立つ成果が挙げられる様になったことが、最大の喜びでした。数学を唯一の武器として研究の分野に足を踏み入れた私でしたが、廿年の歳月を経ることによって、漸く心の晴れる境地に辿り着いたのでした。公職を離れ現役時代を卒業して仕舞った今となつては、思い残すことも無くなりました。過去を振り返り足跡を眺め直すことが、楽しみの一つとなつて居ます。苦しかったことや辛かった経験もありますが、結局は幸運に恵まれたことに、深く感謝しているところです。

「終わりをければ全てよし」と云う実感でしょうか!! ご支援・御協力戴いた方々への想いは、忘れられません。

静かな晩年を満ち足りた気持ちで過ごして居ます。

(千里山会初代世話人会代表)

- 飯島泰蔵氏
- 1925年 9月24日 生まれ
 - 1948年 東京工業大学電気工学科および応用数学科卒業
 - 1948年 逓信省電気試験所入所
 - 1969年 逓産省工業技術院電子技術総合研究所飯島特別研究室長
 - 1972年 東京工業大学工学部教授
 - 1986年 東京工業大学名誉教授、東京工科大学教授
 - 1991年 東京工科大学名誉教授、北陸先端科学技術大学院大学教授
 - 1991年 電子情報通信学会名誉員
 - 1992年 北陸先端科学技術大学院大学副学長
 - 1997年 北陸先端科学技術大学院大学名誉教授
 - 1997年 (株) 創研代表取締役
- 受賞・栄誉
- 1963年 電気学会進歩賞
 - 1977年 電子情報通信学会業績賞
 - 1982年 発明協会全国発明賞
 - 1989年 紫綬褒章
 - 1989年 電子情報通信学会功績賞
 - 1999年 大川出版賞
 - 2002年 大川賞
 - 2005年 瑞宝中綬章

情報処理学会誌 VOL.55 No.7より



千里山会総会にて

二〇一一年十月十六日 於原宿南国酒家(敬称略)

- | | | | |
|-------|-------|------|--------|
| 14 柿崎 | 15 山本 | 赤羽 | 14 三分一 |
| 14 諏佐 | 12 石川 | 9 飯島 | 14 山崎 |